

20150705 吉田松陰とその家族（講師：一坂太郎氏）@テクスピア大阪

長州藩がそのまま山口県になっている。珍しい
萩は日本海側で不便な地
毛利家は、なぜここに城をつくったのか
広島県安芸高田市から徐々に勢力を広げていった
毛利輝元の時に関ヶ原の戦い
西軍から担ぎ出されたが、結果敗北
毛利家は大幅に領地を削られた
周防と長門だけになった
もともとは広島に城を持っていたので山陽道側に領地ほしい
しかし、徳川家康の意向が気になる
徳川としては便利なところに置いておきたくない
そして萩になった
400年前の萩。安武川の三角州は人が住めるようなところではなかった
急ごしらえの埋め立てから萩での歴史がはじまった、まだ新しいまちである。
山口県は平野部がなく田畑がつかれない
だから、産業を興して収益を上げた
蠶、和紙
北前船で商人が買ってきた北国の物品を買い上げ、地の利を生かして売ったりしていた
経済力があつた
裏には100万石のチカラを持っていると言われた
萩は何度も滅亡の危機
教育を大事にした。人が国を支えている意識
藩校明倫館
今でいうと、小学校から大学院までそろっている
プールまであつた（水練）
日本では会津の日進館と萩の明倫館のみ
長州藩人口の1割が武士
その中の数%だけが学べる学校
明倫館で学んだ人が、郷校や私塾を開設し、下級武士を教えた。
私塾だけで100くらいあつた
さらにその中から寺子屋を開設し、商人に教えた（1600くらい）
杉家で松陰生まれる
祖父、七兵衛は学問好き。江戸藩邸で仕えていた
長男が百合之助。

当時、役に就かないと稼げなかったので、田畑を耕していた
滝と結婚し、松本村へ住居をかまえる
長男、梅太郎の長男が杉道助。初代大阪商工会議所会頭
次男、寅次郎（松陰）
長女、千代、松陰と一番仲が良かった。大正期、93歳まで生きている。
※ドラマには出てない
次女、寿。小田村伊之助（＝楫取素彦・初代群馬県令）の妻
三女、艶
四女、文（松陰とは13歳離れている）
兄の松陰については書き残していない。年が離れていて覚えていないのだろう
文は久坂玄瑞と結婚
結婚生活は7年くらいだが、一緒に住んだのは2年くらい
寿が43歳で亡くなり、楫取素彦の後妻に
末っ子、敏三郎 明治9年32歳で亡くなる
松陰は神頼みしなかったが、敏三郎のことに限ってはやっていた
千代の回想録、梅太郎と松陰はすごく仲良かった
百合之助は、梅太郎と松陰に畑仕事をさせ筋骨を鍛えさせながら、学問を教えた
松陰、杉家が優れているところ6点
先祖を大切に、神明を崇める、親族睦まじい、
文学好き、仏法に頼らない、田畑を自ら親しむ
父は厳格で母は陽気であった
松陰はダジャレ好きであった
物凄く議論好きであったがためかもしれない。
議論が白熱し過ぎると刀を抜きかねない状況になりかねないことも考えられる
なんで松陰のような純粋培養の人物が生まれたのか？
松陰が5歳の時に、吉田家の養子に
吉田家は、山鹿流の学者の家
徹底したエリート教育
梅太郎は明倫館へ通っていた
松陰は通わせてもらえず、毎日学者が入れ替わり立ち代わり指導
玉木文之進の指導
虫が松陰の顔にとまったときに顔を書いて、コテンパンに殴られたエピソード
学問を教えているのは松陰（私）のためではなく、天下国家（公）のためである
9歳の時に明倫館の教授見習い、10歳で教授（サポートつき）
11歳で藩主に講義、19歳で一本立ちの教授
ずっとエリート教育を受けていたので明倫館にも通わず、幼馴染がいなかった。

幼少期から青年期、ずっと一人で本を広げていた。親に迷惑かけまいと言っていた。

21 歳までは山口県から出たことなかった

21 歳で旅に出た。

はたしてその資金は？

14 歳の時、文が生まれた。当時、百合之助に役職が与えられる（今でいう警察署長）

杉家は昔貧しかったが、文が育った環境はすでに豊かでお嬢様。

資金があったので松陰は全国を旅できた

佐賀、長崎、平戸、熊本など

各地へ赴き、自分の足で情報をかき集めた＝飛耳長目

外国の情報も集めた

西洋は産業革命おこし、覇権国家に

松陰、22 歳の時に江戸へ

江幡五郎、宮部鼎蔵らと友達になり、一緒に東北へ

ロシアの軍艦が出没していたため、見にいこう！

自分が日本をしょっているという想いがあった

江戸から出発するときに許可がおりてなかったので、脱藩罪とみなされた

藩士の身分を取り上げられ、10 年間の猶予が与えられた

10 年間、旅して勉強して来いという藩主の想いがあった

松陰は、河内、泉州（岸和田）にも来ている。

楠正成公を敬愛していた

旅の最中にペリー来航、開国を迫ってきた

ペリーの黒船 3800 トン。当時日本で一番大きかったもので 100 数十トンくらい

松陰、日本の危機に際し、攘夷を叫ぶ

西洋のことを知って、良いところを取り入れ、まずは国を強くすべき、と考える

下田密航。外国船へ密航試みる。

幕府の対応はこの時は寛大であった。その後萩の野山獄へ。

その後、久しぶりに杉家へ帰る

孟子を講義していたら、明倫館へ行けない下級武士の子が集まってきた

松下村塾のすごさ。たった 2 年弱の開設期間。10 畳ほどの小さな手作りの家屋

学んだ中からたくさんの人材が輩出された（全て近所の子どもたちだった）

人材とは指導者が育てるものである（明倫館朝の素読 3 年生 3 学期の言葉）

伊藤博文、学問はあまりできないが、人柄が良く周旋家の才あると松陰に言われていた

松下村塾では、①素読、②講釈、③自分たちで考えさせる、という教育

そして、松陰が自分でやって見せる先生だった。捨て身の教育

志がすべての源である。（明倫館朝の素読 3 年生 2 学期の言葉）

松陰の志、外圧から日本を護ること

天皇の意向に反して幕府は外国との条約に調印。幕府が外圧に屈した

1914年 世界の84%は西洋列強の支配であった

吉田松陰とその一家は実は映画に

男はつらいよの中に、松陰物語の要素が散りばめられている。